2024年5月の総評に代えて　　高橋修宏

人間のかたちを崩す花衣　　音無早矢（埼玉県）

「花衣」とは、花見に着てゆく女性の晴れ着を表わす春の季語。さらに、桜の花が散りかかった衣という意味も。この一句では、後者の方がふさわしいようだ。衣服に桜の花びらが、次々と散りかかり、降りかかり、やがて人のかたちも崩れてゆくのかもしれない。

びしょ濡れのぬいぐるみ
真夏が軋む　　まちりこ（埼玉県）

一行目と二行目の間に、明らかに飛躍がある。そこを読み取ることは容易ではないが、「びしょ濡れ」や「軋む」から、ある傷みや哀しみを感じることはできよう。何らかの災厄のイメージだろうか。

顔も知らぬ
父の生家に向かうとき
わたしウォーターリリーのつるぎ　　さいう（石川県）

三行目「ウォーターリリーのつるぎ」から、どこか凛としたイメージが伝わってくる。「顔も知らぬ／父の生家」であるゆえに、緊張感でいっぱいになっているのだろうか。そんなセルフポートレートからは、ナルシズムと呼ぶだけではすまない強ささえも感じる。

未来へと向かう
からだは便箋ね
どうか、
やさしく記されていて　　こはくいろ（大阪府）

何より、眼差しが優しい。自らのからだを「便箋」にたとえることで、他者に何かを届ける、伝えるという振舞いがクローズアップされる。三、四行目の願いは、未来への切実な祈りであるのかもしれない。

えいえんがえーえんになる
目を閉じていても
光を感じてしまう　　日下部友奏（東京都）

「えいえん」が「えーえん」になるとは、いったいどのようなことなのか。二行目の「目を閉じていても」光を感じるとは、死（あるいは臨死）の体験を暗示しているのだろうか。

この土地で
私が寝起きしていたら
母が私を
土地の名で呼ぶ　　和泉次郎（新潟県）

地名には、その自然や歴史、さらには伝承や慣習など、さまざまな記憶が積み重なっている。その「土地」に住むことは、その人の印象やイメージにまで作用するのかもしれない。「土地の名で呼ぶ」という言葉が、地名というものの潜勢力（ポテンシャル）を呼び出すような作品。

病院の中にローソン花の雨　　azusa（京都府）

「病院」とは、日常の延長にあるように見えて、けっして日常ではない。たとえば、入院を経験すれば、明らかに日常ではないことが実感させられる。そんな「病院」の中にある「ローソン」は、ときに生活を日常の側につなぎとめるもの。いま、癒しのように「花の雨」が降る。

いつか見た油まみれの動物は
それでも瞼を開き続けた　　貴田雄介（熊本県）

一行目「油まみれ」の動物から、かつての湾岸戦争のときに公開されたペルシャ湾の海鵜の映像を想起した。この映像をめぐって、アメリカ側からの政治的な謀略などの議論があったものの、海鵜などの動物たちが犠牲になったことは間違いない。二行目「それでも……」の言葉が、われわれ人間の愚かさを見つめるようだ。

白杖の音、
コツコツと
見えている僕
にもどこかしるべのように　　うたた（岡山県）

「白杖」が表象するのは、目の不自由な方なのだろう。ときに、われわれと目の不自由な方とを隔ててしまう「白杖」。その音を「しるべ」のように感受しようとするとき、両者の隔たりは消えてゆくのかもしれない。

紫陽花はきっと出口のない迷路　　飛和（長野県）

梅雨時になると、次々と開花する「紫陽花」。ひとつの花が衰えると、また別の花が開きはじめる。そんな「紫陽花」のイメージを、作者は、どこか「出口のない迷路」と感受したのだろうか。

五月雨の円周率の千桁目　　宮下駿（東京都）

いったい「円周率の千桁目」は、どの数字なのだろう。しとしと降りつづく「五月雨」の長雨が、そんな想像（妄想？）をふくらませるようだ。

昼寝覚ああそうだった母だった　　**檜野美果子（宮城県）**

「昼寝」の中で作中主体は、幼い頃、あるいは青年期に戻ってしまったのだろうか。「ああそうだった母だった」が、妙にリアルな「昼寝覚」の実感を引き寄せる。